ひまわり通信

No.00697　2024.12.19(木)

健康寿命から貢献寿命へ

母乳に感謝！！

●誕生の不思議

　誕生の不思議とともに、生まれた新生児の生命が維持される母乳の不思議を知ったとき、私たちの感銘は極度に達するのである。

　なぜか新生児は、２～３日分の食糧と水分を持って生まれてくる。そのため、なんらかの予期せぬ事故で、母乳やその他の栄養物にめぐり合えなかったとしても、新生児は栄養障害も脱水症状も決して起こさない。

　「母乳は食の原点である」と喝破したのは、度重なる人間国宝の名誉を辞し続けた食と美の名達者、北大路魯山人であった。

　母乳と人工栄養の値打ちの差を知らず、愚かにも同一視するかまたは人工栄養を優先した現代科学こそ、誤りの始発点なのであった。そこに質的な価値観を忘れて量的な信仰に終始する、現代の分析偏重の悪弊がスタートしたのである。

　母乳と人工栄養を比較して、含有物の数値の大小で優劣を判定したあまりにも高慢な分析科学は、しかしいまだに勢力を落としてはいないのである。

　ずばり明言するなら、人工栄養は"成分"であるが、母乳は"養分"なのである。

　成分は計量されただけの物質であり、それ以外の何ものも含むものではないが、養分はその栄養素を吸収させるための、まだ知られていない未知のものすべて含んでいることが重要なのである。

　成分は、少なくてはまったく働かないし多ければ過剰になり、また他の種々の合成成分――薬剤や人工添加物質などと反応して、どんな物質に変わるかも知れないが、養分は少なくても多くても不足症状を起こさず過剰にもならず、また他の合成成分と反応することもない。そのわけは、成分は不自然なものであり、養分は自然なものであるからである。

　１９８９年３月、WHO とユニセフは「母乳哺育成功のための１０ヶ条」を世界に向けて発表した。この通達の骨子は、誕生後なるべく早く授乳をはじめること。なるべく早くとは３０分以内くらいの、まだ新生児の出産時の興奮が収まらないうちに最初の授乳をするということ。また、母と児を離すことなく同室とすること、それは新生児がほしがるだびに、いつでも授乳できるような態勢を作っておくためである。そしてその上で、ほしがるだけ授乳することをすすめている。

　以上述べた国際的な最新理論は、**３０分以内の授乳、母児同室、ほしがるままの授乳**という３点を強調しているが、これは日本の助産婦諸姉が大むかしからの伝統的に実行してきたものであり、非科学的と称されつつ妨害や嘲笑を受けてきたこれら先駆者たちの、今鬱憤を晴らすものであることは心から喜ばしいかぎりである。